

「案外」と「意外」の用法変遷と新しい副詞用法について

著者	尾谷 昌則
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	79
ページ	47-66
発行年	2019-09-30
URL	http://doi.org/10.15002/00022415

「案外」と「意外」の用法変遷と 新しい副詞用法について

尾 谷 昌 則

1. はじめに

日本語の副詞は、自立語のうちで活用が無く、用言を修飾するものを指す。山田（1936）以来、日本語の副詞は一般に「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」と三つに大別されることが多いが、山田文法では他にも「感動副詞」や「接続副詞」などが設定されている。「陳述副詞」は、用言というよりは文そのものを修飾しているが、それでも副詞とされており、副詞の外延は広い。

「案外」という副詞は、(1a.)のように使用できるため、一見すると「良い」という形容詞を修飾する程度副詞のように誤解されるかもしれないが、「案外」を文頭に置いて(1b.)のようにも使用できることから、実際には文全体を修飾する陳述副詞（もしくは文副詞）になっている。

- (1) a. 彼は案外良い奴だ。
b. 案外，彼は良い奴だ。

さて、問題は、この「案外」が助詞を伴って使用される場合である。無助詞で使用している(1)以外にも、「に」や「と」を伴って(2)のようにも使用できる（ただし、これには時代差がある）。また、類義の副詞「意外」は、「意外に／と」の両方で使用できるため（例文3）、その点で「案外」とは共通点が認められるが、無助詞で使用することは出来ないと言われており（例文4）、この点で(1)の「案外」とは異なる。

- (2) 案外に／と，彼は良い奴だ。
(3) 意外に／と，彼は良い奴だ。
(4) *意外，彼は良い奴だ。

小稿では、「案外」と「意外」が現在のような用法を持つに至った過程を調査するとともに、助詞の有無も含めて両語の異同について考察を加える。また、最近では「意外」も無助詞で副詞的に使用され

つつあるという事実を指摘し、その変化は「基本」や「自然」といった名詞が副詞化している現象と軌を一にするものであると論じる。

2. 先行研究

2.1. 「案外」について

まず、「案外」に関する辞書の記述を確認しておく。どの辞書も、「予想や期待が外れるさま」という意味を掲載しており、大きな違いはない。『日本国語大辞典』（第二版、2000年、以下『日国』と略す）によれば、「案外」は、『左経記』（1031年）には見られるが、中国文献には見られない上、『今昔物語集』では「案^{ほか}の外」と使用されていることから、和製漢語である可能性が高いという。また、『日葡辞書』（1603-4年）には「Anguai（アングワイ）。すなわち、ヲモイノ ホカ」と記載されているため、「あんがい」という読みが生じたのは室町時代頃であろうとされている。

節用集や近世の文献を調査した覃（2009）によれば、近世には「案外」と「案の外」という2種類の表記があるという。後者には助詞の「の」があることから「あんのほか」としか読めないが、前者にはそれがなく、「あんがい／あんのほか」の2種類の読みが生じ、それが現在の副詞「案外」の元になったと考えている。小稿もこの点には同意する。付言するならば、「あんのほか」は、「あん／の／ほか」という複合名詞であったということである。覃（2009）が指摘している初期の用例(5)(6)を見ても、名詞として使用されていることがわかる。それが、「あんがい」に変化（一語化）し、副詞の用法も獲得したということなのであろう。

(5) 有令申舞人一人装束料、給絹二疋畢、光高一日給三疋、一祭給兩人禄、案外事也。

（『小右記』長和三年四月十日）

(6) 今日の内に寄て責むこそ、彼奴は案の外にて迷はめ。

（『今昔物語集』巻第二十五源頼信朝臣責平忠恒語第九）

覃（2009）の調査では、数は非常に少ないものの、「案(の)外の」、「案外な」、「案外に」という語形も近世に見られたことが報告されており、これらの表現は明治・大正期に入っても散見されるという。それらの用例も加えて、「案外」の変化をまとめると、以下のようになる。なお、（ ）内の数字は、覃（2009）が発見した用例の数である。

表1 「案の外」と「案外」の変遷

	平安～室町	江 戸	明治・大正
副 詞		あん ほか あんがい 案の外／案外	→ あんがい 案外
名 詞	あんのほか 案 外	→ 案(の)外の (11)	→ 案外の
形容動詞		案外な (1)	→ 案外な
		案外に (1)	→ 案外に

「案(の)外」は、もともとは複合名詞であったため、近世に「案(の)外の」という連体助詞を伴った用例が11件も見られても、なんら不思議ではない。面白いのは、「案外な」「案外に」という用例が、わずかではあるが、各1件見られることである。これらは形容動詞の活用形であるため、近世には名詞から形容動詞用法への拡張も起こったと考えられる。実際、名詞と形容動詞は近い存在であるため、このような変化が起こったとしてもまったく不思議ではない⁽¹⁾。しかし、覃(2009)が近世以降の資料で取り上げているのは、副詞の「案外」と「案外に」のみであり、品詞の変化という観点からの分析がされていない。そこで、小稿では「案外の／な／だ／に(も)」といった形態ごとの変遷を調査し、現代に至る「案外」の品詞変化について論じる。

近年の「案外」については、新聞データや『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』などを調査した李(2009)がある。李は、既存の「案外」「案外に」に加えて、「案外と」という語形が1985年(曾野綾子著『太郎物語』)に出現したと指摘している⁽²⁾。また、「案外」は、「と思う」「気がする」「と感じる」のような思考・感知を意味する述語と共起することが多いことから、李(2009:154)では「いわゆる注釈副詞(解説副詞)の性質を色濃く有している」と主張している。注釈副詞というのは渡辺(1957, 1971)のいう「註釈の誘導副詞」か、もしくは工藤(1978)のいう「注釈副詞」のどちらかと思われるが、広くとれば陳述副詞(山田1936)、文副詞(中右1980)、言表事態めあてのモダリティを表す副詞(仁田1991)、ということもできる。本稿では、それらを総括してモダリティ副詞と呼ぶことにする。

2.2. 「意外」について

「意外」については、『日国』に「考えていたことと実際とが、くい違うこと。思いがけないこと。また、そのさま。思いのほか。現代では、俗に「意外と」の形で副詞的にも用いる」との説明があり、形容動詞として扱われている。『新明解国語辞典』(第七版)は、形容動詞という品詞を表立って使用しないため、分類上は名詞とされているが、「一な」と「一に」の語形も記載されており、「いわゆる形容動詞としての用法を併せ有するもの」として扱われている。

「意外」の語誌を調査した覃(2008)は、「意外」が漢語であり、古くは『三代実録』(巻十三, 901年)や『菅家文草』(900年)といった漢文体の資料に見られるが、漢文訓読が盛んになる時代では「ココロノホカ」や「オモイノホカ」といった読み方がされていた可能性があるとは指摘している。しかし、『文明本節用集』(1474年頃)や『運歩色葉集』(天文十七年版, 1549年)には、「意外 イグワイ」と記述されているという。音読みへと変化した(一語化した)時期は、「案外(アンガイ)」よりも「意外(イガイ)」の方が早かった可能性が高い。

「意外と」が俗な用法であると辞書にも記載されていることから、これが近年の口語的な新用法であろうことは想像に難くない。新聞と小説のデータを調査した李(2009)は、「意外に」が基本であり、「意外と」の初出は1963年の『国盗り物語』(司馬遼太郎)であるとしている。ただし、この小説は『サンデー毎日』で1963年から1966年まで連載されたものであるが、李は文庫本化されたものが収められた『新潮文庫の100冊 CD-ROM』で検索したに過ぎず、当該の用例が本当に1963年に(つまり、

連載開始初年に) 使用されたかどうかを確認しているわけではない⁽³⁾。覃 (2008) は、『検家の人々』(北杜夫)と『他人の顔』(安部公房)に「意外と」が見られることから、初出を1964年頃と見ているが、『検家の人々』は1962年から64年にかけて雑誌『新潮』に連載されたものであるため、「意外と」の使用が確実に64年と断定できるわけではない。しかし、いずれにしても、1960年代初頭であるとは言えるだろう。

- (7) a. 久しぶりの都は、意外とよい。(司馬遼太郎『国盗り物語』1963~66年に連載)
 b. 桃子の決意とはまったく意に反した破綻、それだけ画然として物事の決着をつけた事件は、意外と早くきた。(北杜夫『検家の人々』1964年)⁽⁴⁾
 c. そういう事って、意外と当てにならないものよ。(安部公房『他人の顔』1964年)

覃 (2008) は、国会会議録で「意外に」と「意外と」の使用数を調査しており、1980年代後半には「意外と」が「意外に」を上回ったことも明らかにしている(図1)。

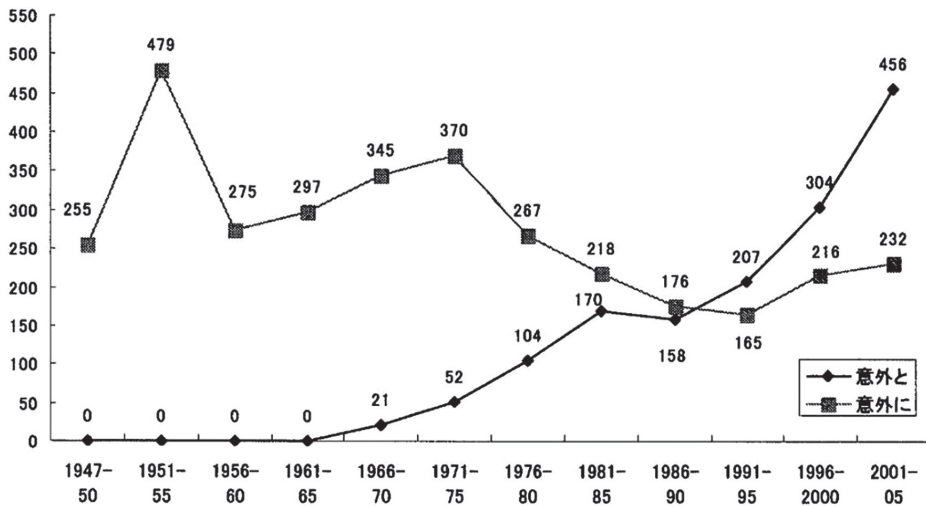


図1 国会会議録(1947-2005年)における「意外と」「意外に」の用例比較表

(覃2008:28)

「意外」の意味・用法については、李(2009)が「案外」と同様に注釈副詞であると指摘しており、「意外と」が読み手(聞き手)に親しく説明するイメージ、「意外に」がやや堅いイメージであると分析している。これは、前者が話し言葉的な文脈で使用される語形であるということとほぼ同義であると考えられる。そもそも新しい用法というものは、文章語からではなく口語から生まれるものである。「意外と」の方が新しい語形であるならば、当然、こちらの方が口語的な(親しみを感じる)ニュアンスになるのも得心がいく。

2.3. 「案外」と「意外」の違いについて

両表現を比較した研究は非常に少ない。『使い方の分かる類語例解辞典』（2003年、小学館）では、「案外」を「漠然と想像したり、常識と思われている範囲を出た様子」とし、「意外」を「自分で予想したり考えていた範囲ではなかったことを示す」と説明しているが、「範囲を出す」と「範囲ではなかった」がどう違うのか説明されていない。

『日国』では、意味的な違いについて二つの指摘がある。一つ目の違いは、判断を下す前と後での落差の大きさである。「意外に」は、事前の予想の思い込みが強いため、後で異なる事実を知った時に、「案外」よりも驚きが大きいのである。

- (8) a. 案外彼は正直者だよ。 (漠然とした感覚)
 b. 意外に彼は正直者だよ。 (落差が大きく、驚いた感じ)

同様の違いは、『明鏡国語辞典』にも見られる。「案外」の語釈には「予想・期待がはずれるさま。案に相違して」としかないが、「意外」の方には「思っていたことと事実が大きく食い違うさま」とあり、落差の大きさについて触れている。ただし、このような違いが生じる理由については、さすがに国語辞典では触れられていない。

二つ目の違いは、事実の裏付けの程度である。「意外に」には、事前の思い込みを覆すに足る具体的事実の裏付けが感じられるのに対して、「案外」には、そのような根拠はあまり感じられず、なにか漠然とした感覚を述べているような印象を受けるというのである。(8)を例にとるならば、a.の文はただ漠然と「彼は正直者だ」と述べているのに対し、b.の文ではそう判断するだけの裏付けを話者が持っているようなニュアンスが生じるということである。これは、いわゆる証拠性判断 (evidentiality) に関するモダリティ研究 (寺村 1984, 森山 1989, 仁田 1989, 1990, 三宅 1994 など) とも無関係ではないだろう。

『日国』では、形態・統語的な違いについても触れられている。(9a.)のように、「案外」は単独で副詞的に使用できるが、「意外」はそれができない。一方で、(9b.)のように、「意外」は見出しなどで感動詞的に使用できるが、「案外」はそれができない。

- (9) a. { 案外 / *意外 } 彼は信用できる。
 b. { *案外 / 意外 } ! 行方不明のW氏が生存していた

このような形態・統語的な違いは確かにその通りなのだが、さすがに国語辞典では、これが示唆する文法的な意義までは触れていない。また、近年のSNSを見てみると、「意外に」ではなく「意外」単独で副詞的に使用されている例が散見される。つまり、助詞の「に」が省略されるという変化の萌芽が見られるわけである。こういった点についても次節で論じることにする。

3. 調査・分析

3.1. 明治～大正期における「案外」の変遷

「案外」について、『明六雑誌コーパス』⁽⁵⁾ (1874～1875年)、『近代女性雑誌コーパス』⁽⁶⁾ (1894～1925年)、『太陽コーパス』⁽⁷⁾ (1895～1925年)の3つで調査を行ったところ、それぞれ0件、19件、155件がヒットした。前者2つは経年変化をみるだけのデータ量が得られなかったため、今回は『太陽コーパス』の結果だけを用いる。155件のうち151件は、「案外の」「案外なる」「案外な」「案外だ」「案外に」「案外にも」(副詞としての)「案外」のいずれかに分類できた。

- | | |
|---|----------------|
| (10) 眼ある観客をして <u>案外</u> の不快を感じしむることあり。 | (『太陽』1895年7号) |
| (11) <u>案外</u> なる依頼 | (『太陽』1895年9号) |
| (12) 不成功に終れば、或は <u>案外</u> な結果を齎すかも知れぬ。 | (『太陽』1917年10号) |
| (13) 斯う善く往くと云ふのは <u>案外</u> だ | (『太陽』1895年5号) |
| (14) 之が實行を見ることも <u>案外</u> に早かるべし | (『太陽』1895年10号) |
| (15) 人心騒動するならんと想像せしに、 <u>案外</u> にも至極沈靜にして | (『太陽』1895年8号) |
| (16) 当期議會中の第一問題たるべき豫算は、 <u>案外</u> 無事に通過せり | (『太陽』1895年3号) |

上記のような用例のうち、現代語でも自然に使用できるものは(16)の「案外」(副詞)くらいであろうか。(14)の「案外に」はやや時代を感じさせる表現であり、若者はあまり使用しないものと思われる。述語となっている(13)の「案外だ」は、小説などでは使用される可能性もあるだろうが、若者はこれもまず使用しない。述語として使用するなら「意外だ」を用いるはずである。さらに、(11)の「案外なる依頼」や、(10)の「案外の不快」といった連体修飾表現は、コーパスでいちいち確認するまでもなく、現代語ではまず使用されない表現といってよいだろう。わずか100年余の間に、「案外」の用法が大きく変化していることが分かる。

以上のような7種の用例の数を年ごとに集計したものが以下の表2である⁽⁸⁾。

表2 『太陽』コーパスにおける「案外」の使用数

	名 詞		形容動詞				副 詞
	連体用法			述語用法	副詞用法		
	案外の	案外なる	案外な	案外だ	案外に	案外にも	案外
1895	2	3	0	1	6	3	4
1901	2	0	0	1	14	2	8
1909	2	0	0	0	8	2	9
1917	2	0	2	2	5	1	35
1925	1	0	0	1	4	1	30

「案外」が無助詞で使用されているものは副詞、連体助詞「の」や「なる」を伴っているものは名詞、「一だ」「一な」「一に（も）」という語形は形容動詞としてそれぞれ分類してある。実数のままでは議論がしにくいので、割合になおしたものを以下に提示する（図2）。

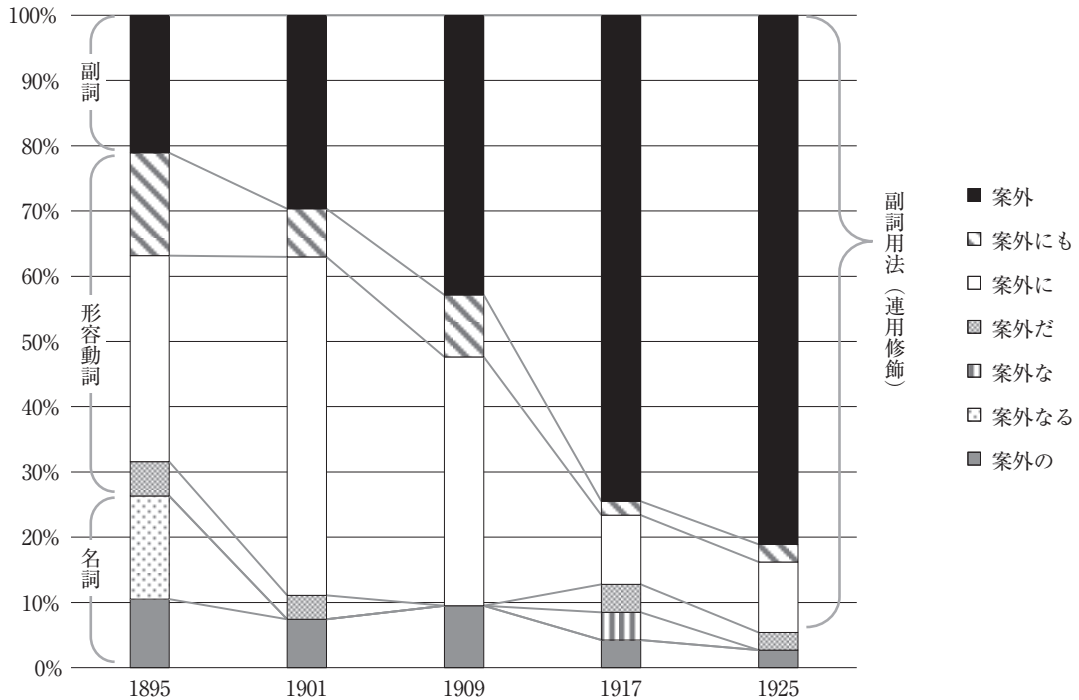


図2 「太陽」コーパスにおける「案外」の使用割合

ここから分かるのは、明治から大正初期にかけて、名詞用法（「案外の」「案外なる」）が廃れ、副詞の「案外」が一人勝ち状態と言えるほど勢力を拡大したことであろう。(5)や(6)といった初期の用例を見ても分かるように、「案(の)外」は名詞であったが、近世には副詞や形容動詞の用法も生まれていた。1895年（明治28年）の時点でも、名詞・形容動詞・副詞の用例がそれなりに出現しており、副詞の「案外」はわずか2割ほどに止まっていたが、ここからわずか30年の間に、副詞の「案外」だけで全体の8割を占めるに至った。形容動詞の副詞的用法である「案外に」と「案外にも」も含めれば、この3者だけで1925年の用例のうち9割も占めていることになる。つまり、この時期に「案外」は一気に副詞（的用法）へと傾いたことになる。

一方で、形容動詞と名詞は急速に姿を消していった。1895年時点では、名詞としての使用が3割弱を占めていたが、1925年には3%弱になっている。形容動詞も、「案外に（も）」という副詞的用法を除けば、連体形の「案外な」は1917年に2例しか見られず、終止形の「案外だ」も1925年には3%弱にまで減少している⁽¹⁰⁾。現代語でも、「案外の／な／だ」という語形はほとんど使用されていないが、その状況は戦前にはほぼ固まっていたとみてよい。唯一、副詞的に用いる連用形の「案外に」だけは、

1925年時点でかろうじて1割ほどの使用割合を維持しており、現代語でもわずかに使用されているが、これは例外的に残存していると言ったほうが適切かもしれない。つまり、「親愛なる～」や「堂々たる～」といった古語の連体形だけが、化石のような慣用表現として現代語に残っているのと同じ現象である。

覃(2009)では、近世資料に「案外な」と「案外に」が各1例見られたということであったが、今回の調査結果を見ると、明治から昭和初期にかけて「案外な」はほとんど見られない。一方で、「案外に」は1901年まで急激に使用数を伸ばしていることが分かる。同時期に出現したであろう「案外な」と「案外に」は、連体形と連用形の違いこそあれ、どちらも形容動詞であるのに、なぜこのような違いが生じたのだろうかという疑問が湧いてくるが、「案外に」も1901年以降は使用数が急減している。多少時期がずれているとはいえ、結局は、形容動詞としての「案外」は昭和前半でかなり廃れてしまい、かろうじて副詞的に使用できる連用形「案外に」だけがわずかに残っている程度となってしまった。

以上のように、「案外」は名詞・形容動詞としての使用が廃れ、副詞用法へと収斂したわけだが、そうなった理由が非常に興味深い。このように変化した要因は様々あるのだろうが、類義表現の「意外」との棲み分けが一因になっているであろうことは想像に難くない。そこで、次は「意外」の変遷について見てみたい。

3.2. 明治～大正期における「意外」の変遷

「意外」についても『太陽』コーパスを用いて調査した。キーワードを「意外」にして検索したところ471件ヒットしたが、先に紹介した「案外」と同じ語形(427件)に絞って分析を進めることとする。それぞれの用例は以下のとおりである。

- | | |
|--|-------------|
| (17) 大敗もまた或は <u>意外</u> のインスピレーションとなることあらん。 | (『太陽』1895年) |
| (18) 事の <u>意外</u> なるに驚かざるを得ず。 | (『太陽』1901年) |
| (19) 何も彼も御存じのやうでも <u>意外</u> な事を仰られる事屢なり | (『太陽』1895年) |
| (20) しかし君が婦人史を研究なさるのは <u>意外</u> だ | (『太陽』1909年) |
| (21) 以上列擧せる經濟上の損害は其勢力 <u>意外</u> に微少にして、 | (『太陽』1895年) |
| (22) <u>意外</u> にも下の如き命が下りました。 | (『太陽』1895年) |
| (23) 聞いて見ると、 <u>意外</u> ！土佐人の英水兵虐殺事件であると…… | (『太陽』1925年) |

ただし、無助詞の「案外」が副詞になるのに対して、無助詞で使用される「意外」は、(9b.)で示したように、感動詞的な用法(山田文法でいう喚体句)となるため、この点だけが唯一「案外」と異なる点である。喚体句であることを分かりやすくするために、次の表3には「意外！」と記載しておくが、実際の用例では「！」が無いものも多い。

表3 『太陽』コーパスにおける「意外」の使用数

	名 詞		形容動詞				感動詞
	連体用法		述語用法	副詞用法		独立用法	意外！
	意外の	意外なる		意外に	意外にも		
1895	36	6	2	1	25	11	1
1901	44	8	6	1	30	9	0
1909	31	6	4	4	18	10	0
1917	28	10	10	5	13	16	0
1925	22	1	23	8	19	14	5

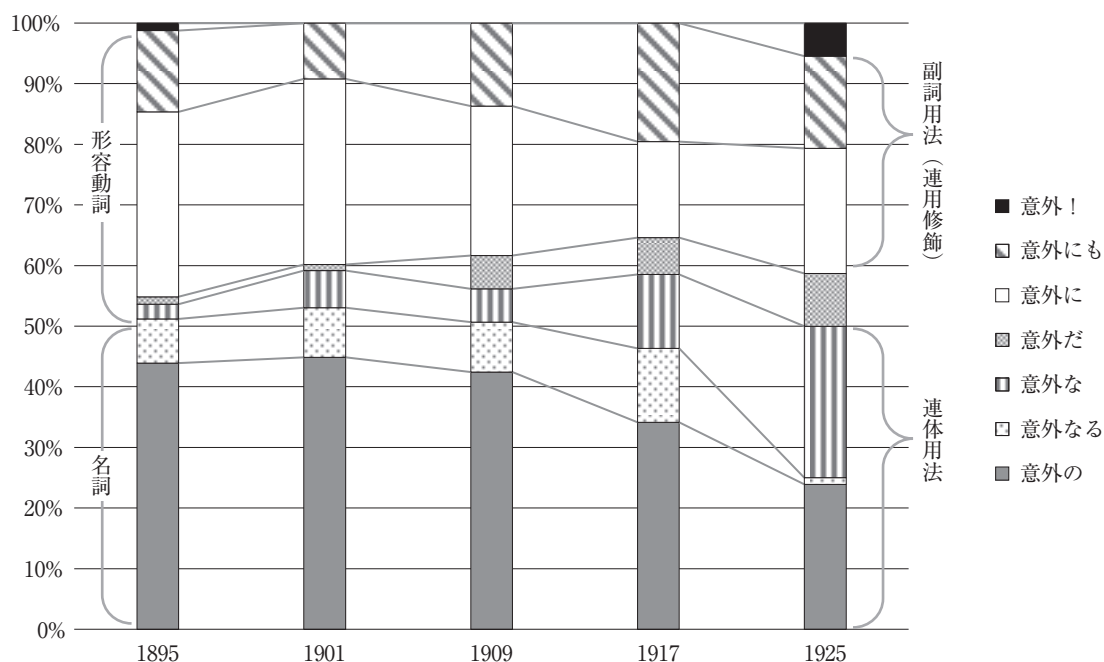


図3 『太陽』コーパスにおける「意外」の使用割合

図3を見ると分かるように、少なくとも1895年当時の「意外」は、名詞と形容動詞の2種類が拮抗していたと言える。特に目立つのは、「意外の」という連体助詞を伴った形である。しかし、これが徐々に減少し、代わりに形容動詞の連体形「意外な」が多くなっていき、1925年（大正14年）にはわずか1件差ではあるが使用数が逆転する。現代語では「意外の」はほぼ絶滅したに等しく、連体修飾は「意外な」に取って代わられたが、そのような変化は大正期から昭和初期（戦前）にかけて起こったものと思われる。

さて、「意外な」だけでなく、述語用法の「意外だ」も着実に使用割合が伸びており、副詞用法の「意外に（も）」も合せると、形容動詞としての使用例は、1925年時点で約7割を占めるまでになった。名詞としての使用は2割強まで落ち込み、残りは喚体句としての使用である。このことから、「意外」は大正から昭和にかけて、名詞としての特性を失い、形容動詞へと傾いたことが分かる。

3.3. 「案外」と「意外」の関連

「意外」が形容動詞へ傾いたことと、前節で見た「案外」が副詞へと傾いたことは、決して無関係ではあるまい。両者は、意味の上では非常に近い関係にあるため、意味の違いというよりは、形式的な違いによる棲み分けの意識が働いた可能性がある。そこで、両者を形容動詞と副詞の観点から比較してみることにする。表4は、先に示した表2と表3からそれぞれの形容動詞用法（一な、一だ、一に（も）の3種）のみを抽出した数である。さらに、表5は、同じく表2と表3から副詞「案外」と副詞的に使用されている形容動詞の連用形（「意外に（も）」と「案外に（も）」）の使用数を抽出したものである。

表4 「意外」と「案外」の形容動詞用法

	意外（形動）	案外（形動）
1895	39	10
1901	46	17
1909	36	10
1917	44	10
1925	64	6

表5 「意外」と「案外」の副詞用法

	意外に（も）	案外に（も）	案外
1895	26	9	4
1901	39	16	8
1909	28	10	9
1917	29	6	35
1925	33	5	30

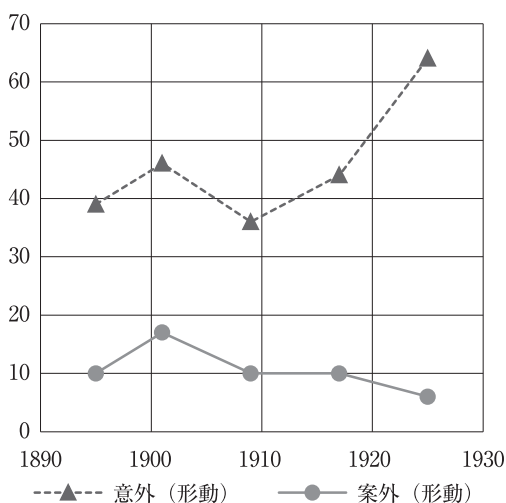


図4 「案外」と「意外」の形容動詞用法

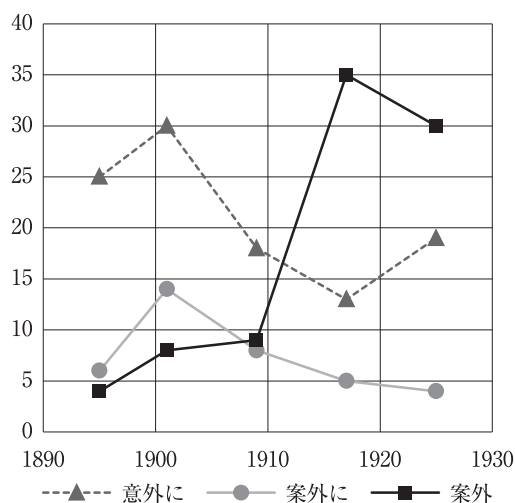


図5 「案外」と「意外」の副詞用法

形容動詞としての使用は、使用数だけみると「意外」が「案外」の3倍以上あるものの、1895年から1909年の間は綺麗な平衡関係になっている。しかし、1909年以降は、「意外」の形容動詞用法が増加するのに対して、「案外」のそれは減少に転じる。同じタイミングで片方が増加、もう片方が減少しているということは、決して両者の増減が無関係ではないことを示唆する。

副詞としての使用状況でも、やはり「意外に」の使用数が「案外に」のそれよりも多いという状況が

見て取れる。しかし、1895年時点では最も使用頻度の低かった副詞「案外」が、1909年を境に激増し、それと入れ替わるように「意外に」と「案外に」の使用が減少している。「案外」は、どの語形においても「意外」よりも使用数が少なく、マイナーな存在であったのだが、無助詞の（＝副詞の）「案外」がはじめて「意外」の使用数を上回ることになったのである。その原因は、そもそも「意外」には副詞が存在しなかったためであろうと思われる。形容動詞連用形の「意外に」は、確かに副詞的に使用することができるが、副詞の専用形ではない。一方、無助詞で使用される「案外」は副詞の専用形である。専用形が出来たことで、連用修飾表現として競合する「案外に」が廃れたのは自然な変化であったと言える。「意外に」の使用数が落ち込んだのも、同様の原因が考えられる。その証拠に、「意外」の形容動詞用法の中で、使用率が落ち込んだのは「意外に」のみであり、終止形「意外だ」と連体形「意外な」はこの時期も着実に使用数を伸ばしていたという事実が挙げられる。

表6 「意外」の形容動詞用法の内訳

	意外な	意外だ	意外に
1895	2	1	25
1901	6	1	30
1909	4	4	18
1917	10	5	13
1925	23	8	19

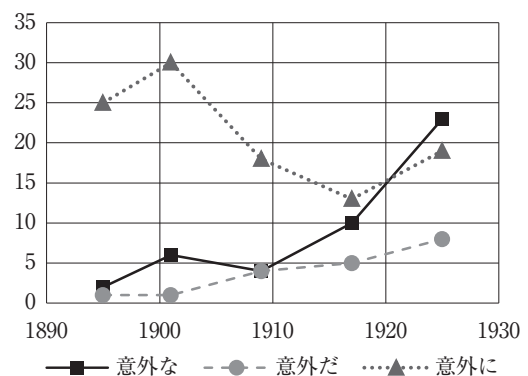


図6 「意外」の形容動詞用法の内訳

3.4. 「案外と」と「意外と」の出現について

戦前は、「案外」「案外に」「意外に」の3形式が副詞および副詞的用法であったが、戦後に入ると、新たに「案外と」と「意外と」が加わることになる。「意外と」の出現は、覃（2008）や李（2009）が指摘するように、1960年代前半と見てよいだろう。一方で、「案外と」の初出については、李（2009）が1985年の『太郎物語』（曾野綾子著）であると指摘している。しかし、注2でも触れたように、1985年は同小説が文庫本化された年であり、実際に使用されたのは『太郎物語 高校編』（新潮社、1973年）である。

(24) あら、案外とよく知ってるじゃないの。 （曾野綾子著『太郎物語 高校編』1973年）

しかし、今回青空文庫の小説を調査したところ、これよりも10年早い、『わたしが・棄てた・女』（遠藤周作、『主婦の友』1963年1月号～12月号に連載、1964年に文庫化）における使用例が見つかった。また、国会会議録においては、さらに早い、1956年の使用例も見つかった。

(25) たかがポスターとチラシと思って馬鹿にしたが、貸してもらったリュックは案外と背中に重い。
(遠藤周作『わたしが・棄てた・女』1963年)

(26) ただ現在は案外と生産者団体が振いませんで、大阪の全販連の青物のものとか、東京神田のAとか、その他その団体に赤字が相当常時生じまして（以下省略）

（参議院 農林水産委員会19号 1956年3月16日）

ここで重要なのは、「案外と」の初出が「意外と」のそれよりも数年早いという点である。明治・大正の使用例を調査した限りでは、「意外」系表現は、「案外」系に比べて3倍以上の使用数を誇っていた。使用頻度の観点から言えば、使用頻度が高いもののほど不規則活用や拡張表現を生みやすいことが知られているため（Bybee 2006）、「案外と」よりも「意外と」の方が先に生じていても不思議はないはずである。しかし、今回調査した限りでは、覃（2008）や李（2009）が指摘している1960年代初旬の用例（7）よりも早い「意外と」の使用例は見つからなかった。国会会議録における「意外と」の初出も、小説作品よりも遅い1966年であった（これは覃（2008）も指摘している）。

(27) 海外開発のための機関をせっかくつくっておいたにかかわらず、意外と伸びない、利用度が少ないということはどこかに問題があるのだろう。

（衆議院 商工委員会24号 1966年4月6日 板川正吾）

以上の事実から、2つの疑問が生じる。1つは、勢力としては大きい「意外」系ではなく、小勢力の「案外」系から、助詞「と」を伴った新規表現が生まれたのはなぜかという疑問である。後発表現と考えられる「意外と」の出現については、意味的に極めて類似した「案外と」が先に出現したことで、ここからの類推によって生じたという説明が考えられるが、そもそも大勢力が小勢力を真似るというのはいささか不自然である。もう1つの疑問は、助詞「と」を伴った新規表現が生まれたのはなぜかということである。そもそも単独で副詞として使用できる「案外」があるのだから、わざわざ「と」を付加して新規表現を創り出す理由が見あたらない。以下、簡単にこれらの問題点について考えてみたい。

1つ目の疑問については、使用頻度の低さを補うだけの理由があったと考えられる。確かに、「案外」系の使用数が「意外」系のそれよりも相対的に小さいのは事実である。しかし、副詞的用法だけに限って考えると、「案外」系には「案外」と「案外に（も）」の2形式があり、これを合わせた使用数は明治中頃から順調に増加し、大正末期には、使用数がずっと横ばいだった「意外に（も）」と肩を並べるに至っているのである（以下のデータは表5に基づく）。むしろ、勢いという点でいうならば、増加の一端をたどっていた「案外」系の方が強いとさえ言えるため、「案外」系の方に新規表現が生まれても不思議はなかったと考えられる。

表7 「意外」と「案外」の副詞用法の使用数

	意外に（も）	案外・案外に（も）
1895	26	13
1901	39	24
1909	28	19
1917	29	41
1925	33	25

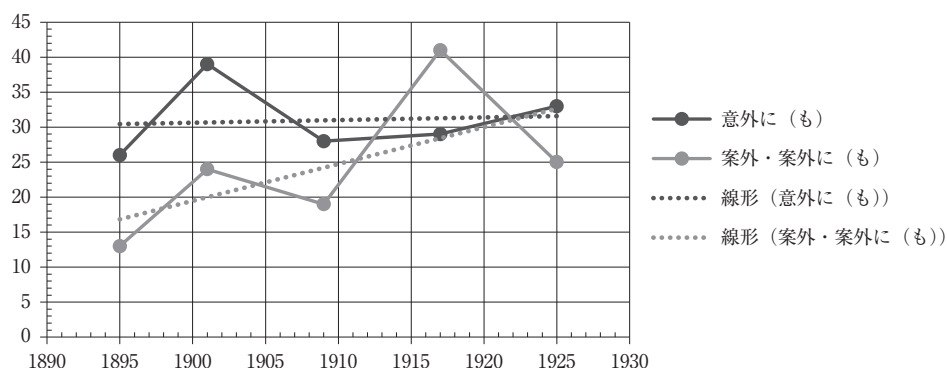


図7 「意外」と「案外」の副詞用法の使用数の変遷

2つ目の疑問については、「と」がどのような状況で使用されているのかを考慮する必要があるだろう。「案外と」と「意外と」だけに限らず、助詞「と」は様々な副詞表現に使用される。オノマトペと結びついたものが比較的多いが、「自ずと」「おいそれと」「不思議と」のように、例外もある。

- (28) ぶらりと、しんみりと、あっけらかんと、悠悠と、おいそれと、いけしゃあしゃあと、
 自ずと、ガクッと、きちんと、くるっと、サクッと、しれっと、チラッと、ちょろっと、
 じいっと、しかと、ずいっと、どっしりと、ずらっと、チクリと、そっと、さっさと、
 うんと、たんと、ちょいと、ちゃんと、ちょこんと、不思議と、しゃんと、さっさと、
 ズバッと、サラッと、ガツンと、ギュッと

また、「と」が省略可能なものも多い。「と」が無くても単独で副詞として使用できる語彙は、明らかにオノマトペが多い。

- (29) ゆっくり（と）、はっきり（と）、しっかり（と）、そそくさ（と）、うっすら（と）
 やんわり（と）、うっかり（と）、バツサリ（と）、いろいろ（と）、キッパリ（と）
 ひらひら（と）、ゆらゆら（と）、ふわふわ（と）、いきいき（と）、ぐっすり（と）
 しっかり（と）、のんびり（と）

以上のような語群の存在を考慮するならば、「案外と」という表現は、これらの表現、特に(29)のように「に」が無くとも単独で副詞として使用できる表現群をモデルとして、類推によって生まれた可能性が考えられる。これを類推方程式で書くと、以下のようになる。

(30) ゆっくり：ゆっくりと＝はっきり：はっきりと＝案外：X X＝案外と

もしくは、「案外」だけでなく「案外に」という語形も既に存在していたわけであるから、「に」と「と」の両方をとることができる副詞的表現をモデルとして類推拡張した可能性を考えることもできよう。

(31) a. 寄席のようなものがあつた。はいった。歌も話も、割りによく分るのでうれしかった
(大杉栄『日本脱出記』1923年)

b. あんたも割と間抜けね。悪いことをするには、覚えがいいってことも大切よ
(川端康成『浅草紅団』1929～30年)

(32) a. 足が自然に谷中の方へ向いた。 (森鷗外『青年』1919年)

b. 気に懸る事があつてね、それで始終何だか心持が快くないの。その所為で自然と体も良くないのかしらと思ふのよ
(尾崎紅葉『金色夜叉』1897-1903年)

以上のような表現から類推が起こって「案外と」が生まれたとするならば、類推方程式は次のようにまとめることができる。

(33) 割りに：割りと＝自然に：自然と＝案外に：X X＝案外と

ただし、こちらの類推が起こった可能性は、それほど高くないものと思われる。理由は2つある。1つは、(31)や(32)のように、「に」と「と」の両方をとることができる事例が極めて少ないことである。豊富に存在する(29)のような例と比較すれば、類推のモデルたるにふさわしいのは後者であろうと推察される。

2つ目の理由は、「案外に」と「案外」の使用頻度の差である。「案外に」は明治から大正にかけて使用数が激減し、1925年には「案外」系表現全体の中での使用率は1割にまで落ち込んだが、それとは逆に、副詞の「案外」は使用数が激増し、1925年時点で使用割合が8割にまで達している(図2を参照)。使用頻度にこれだけの差が生じていたわけであるから、「案外と」への拡張が起こったとすれば、それは「案外に」からではなく、「案外」から起こったとみるのが妥当であろう。念のため、1947年から「案外と」が初めて出現した1956年までの国会会議録を調査し、「案外」と「案外に」の使用状況を確認した。それが次のグラフである。

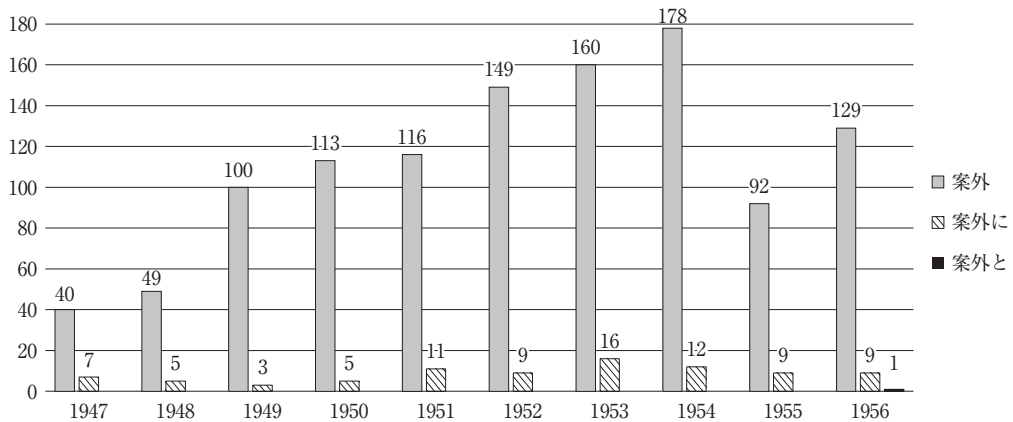


図8 国会会議録（1947～1957年）における「案外」「案外に」「案外と」の使用数

「案外と」が初出する前年に「案外」の使用数が一時的に減っているものの、それでも「案外に」との差は10倍もあり、差は歴然である。このような状況下で、「案外に」からの拡張が起こったとは考えにくい。

3.5. 副詞「意外」の出現

さて、最後に、副詞「意外」の出現について触れておきたい。「意外」は、(9 b.)のような喚体句として、文から独立した用法を持っていたが、副詞的に使用するには「に」を伴わねばならず、「案外」のように無助詞で使用することができなかった。しかし、近年のSNSでは、「に」が脱落して副詞化した「意外」の事例が散見されるようになった。以下は、Twitterから採取した用例であり、早いものは2012年の使用が見られる。

- (34) **意外軽いモノ**だな。まだまだ修行が足りん。ちゅう事やな。kanipeaのバ力を本気で完治させるには、8日間の治療が必要です。
(@kanipea・2011年1月27日)
- (35) めざせポケモンマスター(/ω*)♥
意外すぐ飽きたりして（笑）
(@SmileR1205・2016年7月22日)
- (36) 寮生活って人生初。。
意外よく寝れた！！
今日も東洋ショー始まるよぉー♡
メイク完了ですん！！
(@rukawa_rina・2015年10月22日)
- (37) 150cm台の男の人って**意外**かわいいぞ顔にもよるが
(@JAM1_5・2012年1月11日)

Twitterのサービスは、入力できる文字数に上限があるので、なるべく入力字数を節約しようとして

句読点を敢えて省略した文章を入力するユーザーや、そもそも句読点を入力するのが面倒だということで最初から入力しない（その場合は、古文のようになって読みにくいため、1文ごとに改行することで対応している）ユーザーが多いことでも知られている。以下に示す例は、句読点がないため、2文で「意外。すぐ終わった。」なのか、1文で「意外すぐ終わった」なのかが判別できない例である。

(38) **意外すぐ終わっためんどいしもうやらん**

(@denwa_0216・2015年7月13日)

しかし、先に示した4つの例は、明らかに「に」の脱落と判断できるものばかりである。(34)は句読点を省略しないユーザーであるため、「意外（に）軽い」の意で用いていると判断できる。(35)と(36)は、改行によって1文を表すユーザーであるため、「意外」を1文として（喚体句として）用いているわけではないことが分かる。また、(35)と(37)は、そもそも「意外」を独立した1文と見なせない事例である。仮に(35)が「めざせポケモンスター。意外。すぐ飽きたりして。」という3つの独立文から成っているとしたら、文の関係が支離滅裂になってしまい、文意が通らない。(37)も、「150 cm 台の男の人って意外。かわいいぞ。」という2文に分かれているというよりは、「150 cm 台の男の人って、意外にかわいいぞ。」という解釈の方が遙かに自然であろう。これらは、どう考えても「意外に」の「に」が脱落した事例としか考えられないのである。

そもそも、「に」が脱落して一語の副詞になった事例は、他にも存在する。ざっと分かるだけでも、以下の様なものが挙げられる。

- | | | | | | | |
|------|----|-------|---|------|--------|----------------------|
| (39) | a. | なかなか | → | なかなか | 【平安末期】 | (塚原 1991a, 塚原 1991b) |
| | b. | あながちに | → | あながち | 【鎌倉期】 | (濱田 1991) |
| | c. | 真実に | → | 真実 | 【鎌倉期】 | (鳴海 2015) |
| | d. | さすがに | → | さすが | 【平安期】 | (『日国』) |
| | e. | 自然に | → | 自然 | | |
| | f. | 本当に | → | ほんと | | |
| | g. | 常に | → | つね | | |

(39e, f, g.)は近年変化した例であるが、中でも(39g.)は近畿地方の若者を中心に最近使用が拡大している用法である。

- (40) a. その間吉田は自然その話よりも話をする女の顔の方に深い注意を向けないではいられなかった (梶井基次郎「のんきな患者」1932年)
- b. 「ほんと、この世は苦^{くげん}患ばかりじゃけねえ。」 (遠藤周作「沈黙」1966年)
- c. つね忙しいからねw体調管理は気をつけて

(2010 年 11 月 18 日 https://twitter.com/you_ta_you/status/4926649447481344)

こういった事例があるからには、「意外」の無助詞用法もいずれ定着する日が来るかもしれない。仮に、この無助詞化が定着するとしたら、「案外」に次いで「意外」も副詞になるということであるが、すでに「意外」は形容動詞としての用法が定着しており、それが廃れるとは考えにくい。また、「案外」のように副詞へと傾くとは考えにくい。いずれにせよ、「意外」の無助詞用法が定着するのか、それとも一時的なブームで終わってしまうのか、今後の変化を見守るしかない。

4. おわりに

小稿では、「案外」系表現と「意外」系表現の変化について、特に活用形の観点から調査を行い、その品詞の変化について考察した。その結果、「案外」は名詞から形容動詞、副詞の用法を発展させたが、大正期に副詞へと一気に傾き、「意外」は形容動詞へと傾いたことを見た。また、これらの変化は、決して偶然の結果ではなく、意味の類似した両者の間に、形態・統語的な棲み分けの意識が働いた可能性があることも指摘した。

加えて、新しい語形である「案外と」「意外と」の発生についても調査し、「案外と」の初出が、先行研究の指摘よりも早い 1956 年に確認できることを指摘した。また、「案外と」が、「と」が省略できる他の副詞からの類推によって生まれた可能性がある」と主張した。このような言語変化は、原因を 1 つに限定・確定させることが極めて困難ではあるが、少なくとも、形態的特徴が類似する表現が多く存在することは、類推拡張を引き起こすきっかけにはなる。

最後に、「意外」が、助詞を伴わずに単独で副詞として使用されつつあるという事実を指摘した。この用法は、「案外」からの類推と思われるが、こちらはまだ変化の途中にあるため、今後定着するかどうかは不明である。しかし、少なくとも後接していた助詞「に」が脱落して、独立した副詞になった事例が他にもあることから、言語変化の方向としてはさほど不自然ではない。

注

- (1) 例えば、「健康」や「自然」は名詞と形容動詞の両方で使用できる。両品詞の境界がファジーであることについては、寺村 (1982)、村木 (2000)、Croft (2002) を参照。
- (2) ただし、1985 年というのは文庫版の『太郎物語』が出版された年である。確認してみると、「案外と」が使用されているのは『太郎物語 高校編』(新潮社、1973 年) であるため、初出は 1973 年ということになる。
- (3) 覃 (2008) では、同小説を 1966 年のものとしているが、これは連載が終了して新潮社から単行本 (全 4 巻) が刊行された年である。
- (4) 文庫本が発行されたのが 1964 年であり、実際には 1962 年～4 年にかけて雑誌『新潮』に連載。
- (5) 明治初期の学術啓蒙雑誌『明六雑誌』(1874～1875 年、明六社刊) の全文コーパス。
- (6) 明治後期～大正期の女性雑誌 3 種から 40 冊を抽出した全文コーパス。収録されているのは、『女学雑誌』

- 1894（明治27）年・1895（明治28）年が計31冊、『女学世界』1909（明治42）年が計6冊、『婦人倶楽部』1925（大正14）年が計3冊。総文字数は約210万字。
- （7）明治後期～大正期の総合雑誌『太陽』から1895（明治28）年、1901（明治34）年、1909（明治42）年、1917（大正6）年、1925（大正14）年の5年分を抽出した全文コーパス。総文字数は約1450万字。
- （8）収集した155例のうち4例は、上記7種のどれにも当てはまらない事例であるが、ヒット件数があまりに少ないため今回は分析対象から外した。うち2件は「案外中の案外であつた」と「結果は案外にて」の下線部であるが、これらを品詞で分類するなら名詞用法になるだろう。残りの2例は「案外に思はしからざりき」と「多少案外に思つたらしい」であるが、これらは思考動詞と共起していることから、副詞的な「案外に（美味しい）」とは種類が異なるものと判断した。
- （9）「案外である」という用例もいくつか見られるが、これらは全て「一だ」に含めた。
- （10）勿論、「案外な」の初出が1917年であるということではない。青空文庫で、1890年～1910年が初出の小説作品などを131本ダウンロードして調査したところ、53件見つかった用例のうち、1907年に1件だけ「案外な」の用例が見つかった。
- 「この答えがまた案外なものであった」（泉鏡花「婦系図」1907年）

参考文献

- Bybee, J. 2006. *Frequency of Use and the Organization of Language*. Oxford: OUP.
- Croft, W. 2002. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: OUP.
- 濱田敦 1991. 「あながち・に」『国語副詞の史的研究』127-164. 親典社
- 工藤浩 1978. 「『注釈の副詞』をめぐって」（第78回国語学会春季大会研究発表）（<http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~kudohiro/tyuusyaku.html>にて概要閲覧可）
- 李勇九 2009. 「「案外・意外」における「に・と」の付加・脱落とその文法的性質をめぐって」『立教大学日本文学』103, 151～158. 立教大学日本文学会
- 森田良行 2008. 『動詞・形容詞・副詞の辞典』東京堂出版
- 森山卓郎 1989. 「認識のモードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』57-120. 東京：くろしお出版
- 村木新次郎 2000. 「「がらあき-」「ひとかど-」は名詞か、形容詞か」『国語学研究(39)』80-70.
- 中右実 1980. 「文副詞の比較」國廣哲彌（編）『日英語比較講座 第2巻 文法』157-219. 東京：大修館書店
- 鳴海伸一 2015. 『日本語における漢語の変容の研究——副詞化を中心として』東京：ひつじ書房
- 仁田義雄 1989. 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』1-56. 東京：くろしお出版
- 仁田義雄 2000. 「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』81-159. 東京：岩波書店
- 覃顯勇 2008. 「連用修飾の「意外と」の成立について」『文化継承学論集』4, 11-31. 明治大学大学院文学研究科.
- 覃顯勇 2009. 「「案の外」から「案外」へ：和製字音語化と副詞化」『文学研究論集』30, 15-33. 明治大学大学院文学研究科
- 寺村秀夫 1982. 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』東京：くろしお出版
- 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版
- 塚原鉄雄 1991a. 「「なかなか」から「なかなか」へ」『国語副詞の史的研究』25-89. 親典社
- 塚原鉄雄 1991b. 「「なかなか」の史的展開」『国語副詞の史的研究』165-214. 親典社
- 渡辺実 1957. 「品詞論の諸問題——副用語・付属語」『日本文法講座』77-95. 明治書院
- 渡辺実 1971. 『国語構文論』塙書房
- 山田孝雄 1936. 『日本文法学概論』宝文館

辞典類

- 『使い方の分かる類語例解辞典』2003年，小学館
『日本国語大辞典』第二版（2000-2002年），小学館
『新明解国語辞典』第七版，2011年，三省堂
『明鏡国語辞典』第二版（2010年），大修館書店

On the History of *Angai* and *Igai* and their New Adverbial Usages

Masanori Odani

Abstract

The meaning of *angai* is said to be close to that of *igai*. But these two words have different morpho-syntactic properties. This paper examines the usages of these two words from the view point of their morphological form and shows how their part of speech changed in the early 20th century.

Angai originated from the complex noun *an-no-hoka* in the Heian period. In the Edo period, it gained the usages of adjectival noun and adverb, but those of noun and adjectival noun had almost disappeared by the end of Taisho period, leaving only adverbial usages in the Showa period. On the other hand, *igai*, which also originated from the complex noun *omoi-no-hoka*, gained the usage of adjectival noun in the Edo period. But in the Meiji and the Taisho periods, the noun usage gradually became less frequent, leaving only the adjectival noun usage in Showa period.

This paper points out two more facts. One is that the new adverbial form *angai-to* appeared in 1956, which is about 20 years earlier than the time pointed out in previous analyses. The other is that the particle *-ni* in the adverbial form *igai-ni* is sometimes dropped these days, which means *igai* is becoming an adverb like *angai*.

Keywords : *Angai*, *Igai*, adverb, analogy, particle